

## 母親についての被共感イメージの検討 — 内的作業モデルと共感性との関連 —

松澤 正子

### 問 題

母親は子どもにとってかけがえのない極めて重要な存在であり、健康な心の発達の鍵を握る。母親との間で行われる感情のやりとりが自己の基盤を作り、対人関係のあり方を方向づけるとされる(Bowlby, 1973; 1980)。このため、母親との相互作用において、子どもの感情表出が母親にどのように受け止められてきたかということは、一生涯にわたって、その子どもの精神生活全般に大きな影響を与えると考えられる。その際、現実の母子関係で母親がどのように対応したのかということ以上に、子どものもつ内的な母親イメージが重要になる。なぜなら、そのイメージが個人の感情を受容し、映し返すようなものであれば、実際に母親がいなくても安定した自己像を維持することができ、また、母親以外の他者とのやりとりを肯定的に位置づけることができると考えられるからである。

自らの感情表出が相手にどのように受け止められたかについてのイメージを「被共感イメージ」と呼ぶ。角田(1993)は、大学生がもつ母親についての被共感イメージを測定するために、独自の被共感イメージ課題を考案した。これは、小学生くらいの子どもの感情体験をするであろう場面において、母親にその気持ちを訴えかけるストーリーを提示し、その後「あなたの母親ならどのように答えると思うか」を自由に記述させるものである。角田はその記述内容と共感性との関連を検討し、共感性の高い人ほど、母親についての被共感イメージが受容的であることを明らかにした。そして、他者感情への共感性は、内在化された母親についての受容的な被共感イメージが基盤となって機能すると論じた。

母親についての被共感イメージは、共感性の基盤となるだけでなく、他者と自己の関係に関する心的表象の基盤ともなると考えられる。このよう

な心的表象は「内的作業モデル」とよばれ、人はこれを現実世界のシュミレーションモデルとして使用することにより、外界からの情報を処理し、安全感を得るための有効な行動プランを立てる(Bowlby, 1973; 1980)。この内的作業モデルは、乳幼児の愛着パターン(Ainsworth, et al., 1978)に対応した3つの特性(安定性・回避性・アンビバレント性)で評価されることが多い(戸田, 1990)。母親についての受容的な被共感イメージは、安定的な内的作業モデルの基盤となり、回避性やアンビバレント性を抑制すると予想される。

ところで、子どもが表出する感情にはさまざまな種類のものがある。母親は感情の種類によって異なる受け止め方をするかもしれない。子どものもつ被共感イメージも感情の種類によって異なる可能性がある。子どもの自己像を支える被共感イメージの中で、特に重要な種類の感情といったものがあるのだろうか。角田(1993)の被共感イメージ課題では、評定の信頼性を考慮して「悲しみ」「期待」「怒り」の3つの感情が取り上げられたが、大辻・塩川(2000)は「不安」感情に対する母親の共感的応答の重要性を指摘している。より多くの種類の感情に対する被共感イメージを取り上げて検討してみる価値があるだろう。特に、子どもの日常生活で頻繁に生じ、母親との相互作用が引き起こされやすいと考えられる感情として、「得意」「驚き」「期待」「好意」「喜び」といったポジティブ感情と、「不安」「恥」「悲しみ」「退屈」「怒り」といったネガティブ感情を取り上げてみたい。

また、角田(1993)の被共感イメージ課題では、母親がすると予想される言語的な応答を自由記述で回答させて、その内容から「受容」「中立」「拒否」の3タイプに分類した。優れた方法だと思いが、記述された文章だけから分類するのは容易ではない。同じ言葉でも、どのような感情を込めるかによって分類が異なってくることもあるだろう



(立道, 2007)。また、子どもの自己像は、被共感イメージの言語的な側面以上に、感情的な側面からの影響を受ける可能性もあるのではないだろうか。

よって、本研究は次の2点を目的として行う。  
①母親についての被共感イメージを、10種類の感情を取り上げて、その言語的側面と感情的側面から検討をおこなう。②その上で、被共感イメージと内的作業モデルならびに共感性との関連を明らかにする。

## 方法

### 調査時期および調査対象者

都内の大学に通う大学生245人(男子89人、女子155人、不明1人、平均年齢19.5歳)を対象に、2009年12月に質問紙調査を実施した。

### 調査手続き

著者が担当する一般教養科目の講義中に無記名で集団実施した。

### 調査内容

本研究で使用した質問紙は、(1)フェイスシート項目、(2)被共感イメージ課題、(3)内的作業モデルの測定、(4)共感性の測定、の4つのパートから成る。

(1)のフェイスシート項目では、年齢、性別、

学部、学年をたずねるとともに、「小学生くらいの頃に母親と暮らしていたか」をたずねた。暮らしていなかったと回答した者には、さらに「子どもの頃にもっとも世話をしてくれた人」についてたずね、以降の質問項目では「母親」をその人に置き換えて回答するよう求めた。これに該当した者は1人で、母親の代わりにもっとも世話をしてくれた祖父母について回答した。

(2)の被共感イメージ課題は、角田(1993)をもとに、ポジティブ感情5種類(得意・驚き・期待・好意・喜び)、ならびにネガティブ感情5種類(不安・恥・悲しみ・退屈・怒り)の計10種類の感情について作成した。まず、子どもがそれぞれの感情を体験するであろう場面を記述した数行の短文と、子どもが母親にその気持ちを訴えかける発言を提示する。そして、子どもの訴えに対して「あなたの母親ならどのように答えると思うか」を記述させ(言語回答)、「答えている時の表情」を3種類の感情を表す顔図形(笑顔・無表情・渋顔)の中から選択させた(表情回答)。表1に質問方法を悲しみ場面を例にとり示す。また、表2には課題に用いた10種類の感情場面の概要と子どもの発言を示す。

(3)の内的作業モデルの測定は、戸田(1990)により構成された21項目の尺度を用いた。3つの下位尺度からなり、それぞれ「安定尺度」6項目、「回避尺度」6項目、「アンビバレント尺度」6項目である。安定尺度は、他者は応答的で自己

表1 被共感イメージ課題の質問方法(悲しみ場面の例)




|  |
|--|
| <p>【教示】 いくつかの短文があります。子どもが母親に話しかけた後、母親が何か言うのですが、そこは空けてあります。あなたの母親ならどのように答えるか考えて、言葉を入れてください。また、その時の母親の表情に最も近いものを、3つの表情の中から1つ選んで○をつけてください。なお、何も言わないと思う場合には、「無言」などと記入してください。</p>   |
| <p>【問】 Aちゃんは動物が好きなので、友達から蛙を譲ってもらいました。毎日世話をしていたのですが、ある寒い朝に死んでしまいました。Aちゃんはそれを見つけて涙が出そうになりました。</p> <p style="padding-left: 40px;">A 「お母さん、蛙が死んじゃった」</p> <p>あなたの母の言葉 「</p>   |
| <p style="text-align: center;">あなたの母の表情</p> <div style="display: flex; justify-content: center; gap: 20px;"> <div style="text-align: center;"> <br/>( )         </div> <div style="text-align: center;"> <br/>( )         </div> <div style="text-align: center;"> <br/>( )         </div> </div> |



表2 被共感イメージ課題に用いた10種類の感情場面と子どもの発言

| 感情の種類     | 感情場面      | 子どもの発言                        |
|-----------|-----------|-------------------------------|
| 〈ポジティブ感情〉 |           |                               |
| 得意        | 授業中にほめられる | お母さん、描いた絵を先生にほめられたよ           |
| 驚き        | 虹を発見      | お母さん、今日大きな虹を見たよ               |
| 期待        | 遠足の前の晩    | お母さん、早く明日にならないかな              |
| 好意        | 大好きなお友達   | お母さん、〇〇ちゃんとこれからもずっといっしょに遊びたいな |
| 喜び        | 誕生日のプレゼント | お母さん、おばあちゃんからプレゼントをもらったよ      |
| 〈ネガティブ感情〉 |           |                               |
| 不安        | ピアノの発表会の日 | お母さん、ちゃんとひけるかな                |
| 恥         | 授業中に間違える  | お母さん、漢字の読み方を間違えて笑われちゃった       |
| 悲しみ       | 育てていた蛙が死ぬ | お母さん、蛙が死んじゃった                 |
| 退屈        | 病院で待つ     | お母さん、順番まだかな                   |
| 怒り        | いじわるをされる  | お母さん、〇〇ちゃんにおもちゃをこわされちゃった      |

は援助される価値のある存在であるという表象を測定する。回避尺度は、他者は拒否的で援助が期待できないという表象と、これを補完するための自己充足的な存在という自己に関する表象を測定する。アンビバレント尺度は、他者に対する信頼と不信のアンビバレントな表象と自己不全感を測定する。“非常によくあてはまる”から“全くあてはまらない”の6件法で回答させた。なお、各尺度の信頼性を確認したところ、安定尺度 $\alpha=.820$ 、回避尺度 $\alpha=.674$ 、アンビバレント尺度 $\alpha=.815$ であった。

(4)の共感性の測定は、角田(1991)により3下位尺度から構成された20項目から、下位尺度ごとに因子負荷量の高かった3項目を抜粋し、計9項目を用いた。3つの下位尺度は、a)相手の肯定的な感情体験に対する共感経験を測定する尺度、b)相手の否定的な感情体験に対する共感経験を測定する尺度、c)共感経験の打ち消し(「相手の感情を感じとろうとしたことはない」といった項目からなり、角田は“対人関係の保持”と命名している)を測定する尺度である。“とても当てはまる”から“まったく当てはまらない”の7件法で回答させた。本研究では、9項目の因子分析を行ったところ2因子が抽出された。1つ目の因子6項目は、角田のa)とb)を合わせたもので、肯定・否定に関わらず相手の感情体験に対する共感経験に関わるものであるため「共感経験尺

度」とする。また、残りの3項目からなる2つ目の因子は角田のc)と一致し、は「共感経験の打ち消し尺度」とする。各尺度の信頼性を確認したところ、共感経験尺度 $\alpha=.808$ 、共感経験の打ち消し尺度 $\alpha=.723$ であった。

#### 被共感イメージの言語回答の分類

角田(1993)にもとづき、感情ごとに回答を「受容」「中立」「拒否」のいずれかのカテゴリーに分類した。分類基準は、筆者と心理学科3年生4人の協議により作成した。分類基準は表3に示す。2つ以上の分類にあてはまる記述の場合は、より受容的なカテゴリーに分類した。これ以外に、「無言(何も言わないだろうという回答)」も分析対象としたが、何も書かれていない場合や無関係なことが書かれた回答は「無回答」として分析から除外した。回答の分類は筆者と心理学科3年生4人が分担して行った。分類が難しい回答については、表情についての回答も考慮しながら5人で協議して決定した。

## 結果

#### 被共感イメージの言語回答

感情の種類によって回答率が異なり、言語回答における無回答者の割合は、最も低い「得意」と「喜び」の問題で7.8%、最も高い「怒り」の問題

表3 被共感イメージ課題の言語回答の分類基準

| 感情の種類 | 分類 | 内容と回答例   |
|-------|----|--|
| 得意    | 受容 | 「よかったね」など、子どもの喜びを受け止める。<br>「すごいね」「上手に描けたね」など、子どもを褒める。  |
|       | 中立 | 「どんな絵を描いたの?」「見せて」など、絵に関心を示す。<br>「あらそう」「へえ」など、子どもの言ったことを理解したことを伝える。   |
|       | 拒否 | 「勉強もほめられるといいんだけどね」と、喜びを否定する。<br>「あまりうまくない」「お母さんの方がうまい」など、絵を否定して子どもの喜びを奪う。  |
| 驚き    | 受容 | 「よかったね」「すごいね」など、子どもの喜びを受け止める。<br>「ラッキーだったね」「いいことあるかもね」など、子どもの気分を盛り上げる。<br>「きれいだった?」「どこに出てたの?」など、子どもからさらに話を聞こうとする。  |
|       | 中立 | 「いいな」「見たかったな」など、虹への関心を示す。<br>「あらそう」「そっか」「へえ」など、子どもの言ったことを理解したことを伝える。   |
|       | 拒否 | 「はいはい」「あっそう」など、関心がなさそうな受け答えをする。<br>「お母さんもすごいを見たことある」など、自分の方がすごいことを伝える。   |
| 期待    | 受容 | 「楽しみね」「楽しいもんね」など、子どもの気持ちがわかることを伝える。<br>「晴れるといいね」など、期待感を盛り上げる。  |
|       | 中立 | 「すぐ明日になるよ」など、子どもの言葉を文字通り受け取って反応する。<br>「明日のためにもう寝なさい」など、子どもの言葉を受けた上で、寝よう指示する。<br>「前の日が一番楽しいもの」「楽しみなのね」など、子どもの行動を説明する。<br>「気をつけて行ってくるのよ」など、安全を心配する。<br>「そうね」など、子どもの言ったことを理解したことを伝える。 |
|       | 拒否 | 「早く寝なさい」「寝坊したらいけないから早く寝なさい」など、早く寝よう指示するだけ。<br>「はしゃぎすぎ」「せっかち」「焦るな」など、期待の感情を否定する。<br>「何を言っているの」など、子どもの言葉を理解しない。<br>「ならないよ」「早くなったら困るよ」など、子どもの言葉を否定する。                                 |
| 好意    | 受容 | 「よかったね」「いい友達ができたね」など、子どもの喜びを受け止める。<br>「〇〇ちゃんも、そう思ってくれているといいね」と、子どもの期待感をもちあげる。  |
|       | 中立 | 「帰る時間は?」「どこで遊ぶの?」など、遊びのことを尋ねる。<br>「そうね」「そっか」など、子どもの言ったことを理解したことを伝える。   |
|       | 拒否 | 「勉強もしなさい」など、子どもが遊びたい気持ちを受け止めない。<br>「迷惑をかけないように」など、浮かれている気持ちをいさめる。<br>「いろいろな子と遊びなさい」と、仲よくなることに否定的。  |
| 喜び    | 受容 | 「よかったね」など、子どもの気持ちがわかることを伝える。<br>「おめでとう」など、喜びを盛り上げる。<br>「何をもらったの?」など、子どもからさらに話を聞こうとする。  |
|       | 中立 | 「お礼は言った?」「大切にしなさい」など、感謝するよう促す。<br>「いいなあ」など、うらやましがる。  |
|       | 拒否 | 「甘やかされて」など、プレゼントをもらうことをよく思っていないことを伝える。<br>「こちらによこしなさい」など、プレゼントを取り上げようとする。  |
| 不安    | 受容 | 「大丈夫だよ」「ひけるよ」など、失敗しないだろうと言って子どもを安心させる。<br>「普段どおりにやればいい」「楽しんでやればいい」など、心配する必要がないことを伝える。  |
|       | 中立 | 「誰でも緊張するよ」など、緊張しているのが自然なことだと説く。<br>「がんばれ」「落ち着いて」など、緊張を乗り越させる言葉かけをする。<br>「お母さんたち見に行くから」など、子どもの感情とは関係のない事実を伝える。  |
|       | 拒否 | 「ちゃんと練習したの?」など、子どもの不安を助長するようなことを言う。<br>「緊張しないで、しっかりしなさい」「自信を持ちなさい」など、子どもの緊張を非難する。  |



|     |    |  |
|-----|----|--|
| 恥   | 受容 | 「大丈夫」「平気」「どんまい」など、子どもをなぐさめる。<br>「そういう時もある」「誰にでもある」など、恥ずかしく思う必要がないことを伝える。<br>「これで覚えられたね」「勉強になったね」など、よい経験をしたのだと考えるようにさせる。  |
|     | 中立 | 「どの漢字？」など、何を間違えたか尋ねる。<br>「あらそう」「そっか」など、子どもの言ったことを理解したことを伝える。<br>「次間違えないように」「復習しなさい」など、勉強するよう促して励ます。  |
|     | 拒否 | 「ばかだね」「勉強しないから」など、間違っただけを責める。<br>「そんなことでよくよしないの」など、恥ずかしく思う気持ちを非難する。  |
| 悲しみ | 受容 | 「悲しいね」「辛いね」「残念だね」など、子どもの気持ちがわかることを伝える。<br>「お墓を作ってあげよう」「埋めてあげよう」など、弔いを共にしようとする。<br>「よく世話をした」「蛙は幸せだった」「どんまい」など、罪悪感をもたせないようにする。<br>「今は天国にいる」「お星さまになった」など、蛙を心配させないようにする。 |
|     | 中立 | 「生物はみな死ぬ」「仕方ない」「生まれ変わる」など、自然の摂理を説いて諦めさせる。<br>「寒くなったからだろう」「寿命だろう」など、原因を理解させる。<br>「お墓を作ってあげなさい」「埋めてあげなさい」など、弔いを指示する。<br>「そう」「そっか」「死んだのね」など、子どもの言ったことを理解したことを伝える。       |
|     | 拒否 | 「世話をしないからだ」「友達に謝りなさい」など、子どもを責める。<br>「捨てなさい」「埋めなさい」など、蛙を処理させる。  |
| 退屈  | 受容 | 「遅いね」「早くしてほしいね」「まだかな」など、子どもと同じ気持ちであることを伝える。<br>「もうちょっとだよ」「がんばろうね」など、子どもを励ます。   |
|     | 中立 | 「本でも読んでいたら？」「順番来るまで寝てたら？」など、退屈をしのぐ方法を提案する。<br>「混んでるね」「まだだよ」など、事実を伝える。<br>「みんな風邪をひいちゃったのかな」など、遅い理由を推測して伝える。   |
|     | 拒否 | 「がまんしなさい」「おとなしくしなさい」など、子どもの不満をいさめる。<br>「順番はちゃんと守らないとダメ」など、社会のルールを言い聞かせる。   |
| 怒り  | 受容 | 「ひどいね」「大切にしていたのにね」など、相手が悪いのだということを伝える。<br>「残念だね」「一緒に直そう」など、おもちゃを壊された悲しみを受け止め、慰めようとする。  |
|     | 中立 | 「どうして壊されたの？」など、理由を聞く。<br>「新しいのを買ってあげる」「直してあげる」など、壊れたおもちゃのみを問題とする。<br>「あらそう」「そっか」など、子どもの言ったことを理解したことを伝える。   |
|     | 拒否 | 「あなたが悪いことをしたんでしょ」など、子どもを責める。<br>「わざとじゃないんでしょ」「仕方がないよ」など、相手の行動に問題がないことを伝える。<br>「怒らないで」「許してあげなさい」「悪口言っちゃだめ」など、子どもの怒りの感情を否定する。  |

で16.7%であった。表4には性別ごとに回答の分類結果を示す。「得意」・「不安」の感情は、ほとんどの者が受容的なイメージをもっていた。「喜び」・「驚き」の感情は、受容または中立的なイメージをもつ者がほとんどで、拒否的なイメージをもつ者はわずかであった。「好意」・「退屈」・「悲しみ」・「期待」の感情では、拒否的なイメージをもつ者も1~2割いた。このうち「退屈」・「期待」の感情に対する被共感イメージは性別による差があり、ともに男子の方が拒否的なイメージをもつ者が多かった。「恥」・「怒り」の感情は、男女ともに拒否的なイメージをもつ者が3割

ほどいた。

感情間の関連性を検討するため、「受容」を2点、「中立」を1点、「非受容」と「無言」を0点とする受容度得点を用いて因子分析を行ってみたが、複数の因子が存在することを示す結果は得られなかった。そこで、回答の一貫性を確認するために相関関係を検討したところ、多くの感情間に弱い正の相関が認められた(表5)。ただし、「怒り」の感情のみは他の感情と相関がなく、反応パターンが独特であることがわかった。全体の $\alpha$ 係数は.633で、「怒り」感情項目を除外しても.666であり、全体に緩やかな一貫性をもつといえよう。

表4 被共感イメージ課題の言語回答の分類結果 (受容の回答数が多い順に示す)

| 感情の種類 | 性別 |           | 受容            | 中立           | 拒否           | 無言          | 計   | $\chi^2$ 検定       | 無回答 <sup>1)</sup> |
|-------|----|-----------|---------------|--------------|--------------|-------------|-----|-------------------|-------------------|
| 得意    | 男子 | 人数<br>(%) | 65<br>(86.7)  | 3<br>(4.0)   | 6<br>(8.0)   | 1<br>(1.3)  | 75  | $\chi^2(3)=5.70$  | 14<br>(15.7)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 137<br>(91.3) | 9<br>(6.0)   | 4<br>(2.7)   | 0<br>(.0)   | 150 |                   | <i>n.s.</i>       |
| 不安    | 男子 | 人数<br>(%) | 58<br>(77.3)  | 11<br>(14.7) | 4<br>(5.3)   | 2<br>(2.7)  | 75  | $\chi^2(3)=5.85$  | 14<br>(15.7)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 126<br>(86.3) | 16<br>(11.0) | 4<br>(2.7)   | 0<br>(.0)   | 146 |                   | <i>n.s.</i>       |
| 喜び    | 男子 | 人数<br>(%) | 48<br>(61.5)  | 27<br>(34.6) | 2<br>(2.6)   | 1<br>(1.3)  | 78  | $\chi^2(3)=8.21$  | 11<br>(12.4)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 116<br>(78.9) | 29<br>(19.7) | 1<br>(.7)    | 1<br>(.7)   | 147 |                   | $p<.05$           |
| 驚き    | 男子 | 人数<br>(%) | 47<br>(68.1)  | 19<br>(27.5) | 1<br>(1.4)   | 2<br>(2.9)  | 69  | $\chi^2(3)=1.27$  | 20<br>(22.5)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 91<br>(61.5)  | 51<br>(34.5) | 3<br>(2.0)   | 3<br>(2.0)  | 148 |                   | <i>n.s.</i>       |
| 好意    | 男子 | 人数<br>(%) | 34<br>(53.1)  | 18<br>(28.1) | 5<br>(7.8)   | 7<br>(10.9) | 64  | $\chi^2(3)=1.36$  | 25<br>(28.1)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 80<br>(55.9)  | 43<br>(30.1) | 11<br>(7.7)  | 9<br>(6.3)  | 143 |                   | <i>n.s.</i>       |
| 退屈    | 男子 | 人数<br>(%) | 29<br>(37.2)  | 25<br>(32.1) | 18<br>(23.1) | 6<br>(7.7)  | 78  | $\chi^2(3)=12.36$ | 11<br>(12.4)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 84<br>(59.6)  | 35<br>(24.8) | 19<br>(13.5) | 3<br>(2.1)  | 141 |                   | $p<.01$           |
| 悲しみ   | 男子 | 人数<br>(%) | 30<br>(42.9)  | 29<br>(41.4) | 10<br>(14.3) | 1<br>(1.4)  | 70  | $\chi^2(3)=3.93$  | 19<br>(21.3)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 70<br>(48.3)  | 63<br>(43.4) | 9<br>(6.2)   | 3<br>(2.1)  | 145 |                   | <i>n.s.</i>       |
| 期待    | 男子 | 人数<br>(%) | 24<br>(33.3)  | 24<br>(33.3) | 17<br>(23.6) | 7<br>(9.7)  | 72  | $\chi^2(3)=13.61$ | 17<br>(19.1)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 63<br>(43.2)  | 62<br>(42.5) | 19<br>(13.0) | 2<br>(1.4)  | 146 |                   | $p<.01$           |
| 恥     | 男子 | 人数<br>(%) | 23<br>(34.3)  | 18<br>(26.9) | 25<br>(37.3) | 1<br>(1.5)  | 67  | $\chi^2(3)=2.71$  | 22<br>(24.7)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 45<br>(30.2)  | 57<br>(38.3) | 45<br>(30.2) | 2<br>(1.3)  | 149 |                   | <i>n.s.</i>       |
| 怒り    | 男子 | 人数<br>(%) | 18<br>(27.3)  | 26<br>(39.4) | 20<br>(30.3) | 2<br>(3.0)  | 66  | $\chi^2(3)=2.08$  | 23<br>(25.8)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 34<br>(24.8)  | 68<br>(49.6) | 32<br>(23.4) | 3<br>(2.2)  | 137 |                   | <i>n.s.</i>       |

1) 無回答者の%は、全体に占める割合を示す。



表5 被共感イメージ言語回答の感情間の相関

|     | 得意 | 不安   | 喜び         | 驚き          | 好意         | 退屈          | 悲しみ        | 期待          | 恥           | 怒り    |
|-----|----|------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|-------------|-------|
| 得意  | —  | .130 | .183<br>** | .240<br>*** | .190<br>** | .078        | .176<br>*  | .241<br>*** | .252<br>*** | .095  |
| 不安  |    | —    | .180<br>** | .127        | .193<br>** | .141<br>*   | .150<br>*  | .301<br>*** | .307<br>*** | -.012 |
| 喜び  |    |      | —          | .220<br>**  | .152<br>*  | .237<br>*** | .013       | .132        | .158<br>*   | .107  |
| 驚き  |    |      |            | —           | .126       | .165<br>*   | .055       | .031        | .275<br>*** | -.034 |
| 好意  |    |      |            |             | —          | .255<br>*** | .228<br>** | .297<br>*** | .347<br>*** | .121  |
| 退屈  |    |      |            |             |            | —           | .161<br>*  | .163<br>*   | .197<br>**  | .080  |
| 悲しみ |    |      |            |             |            |             | —          | .188<br>**  | .181<br>**  | -.013 |
| 期待  |    |      |            |             |            |             |            | —           | .273<br>*** | .074  |
| 恥   |    |      |            |             |            |             |            |             | —           | .015  |
| 怒り  |    |      |            |             |            |             |            |             |             | —     |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

### 被共感イメージの表情回答

表情回答の無回答者の割合は言語回答に比べて低く、最も高い「好意」の問題でも6.5%であった。表6には性別ごとに回答の結果を示す。「得意」「喜び」「驚き」「好意」「期待」といったポジティブ感情の問題では、ほとんどの者が「笑顔」を選択した。それに対して、ネガティブ感情の問題では、感情の種類によって回答が異なった。「不安」の感情は、ポジティブ感情と同様に「笑顔」を選択する者が多く見られた。「恥」や「退屈」の感情では、「笑顔」を選択する者もいる一方で、「無表情」「渋顔」を選択する者も少なくなかった。「怒り」や「悲しみ」の感情では「笑顔」を選択する者は少なく、「渋顔」が半数以上を占めた。

感情間の関連性を検討するため、「笑顔」を2点、「無表情」を1点、「渋顔」を0点とする笑顔度得点を用いて、主因子法プロマックス回転の因子分析を行ったところ、2因子が抽出された(表7)。第1因子は、ポジティブ感情5種類に「不安」と「恥」を加えた7つの感情から成り、「笑顔」の回

答が多くみられる感情群であることから、「笑顔誘引感情」と名付けた。第2因子は、「悲しみ」「退屈」「怒り」の感情から成り、「渋顔」の回答が多くみられる感情群であることから、「渋顔誘引感情」と名付けた。 $\alpha$ 係数を算出したところ、「笑顔誘引感情」は.706と一貫性が示されたが、「渋顔誘引感情」は.401で一貫性は低かった。

### 被共感イメージと内的作業モデルとの関連

10種類感情に対する被共感イメージの言語回答における受容度得点の平均と、内的作業モデルの3つの尺度得点との相関を検定したところ(表8)、受容度得点はアンビバレント尺度とのみ有意な負の相関がみられた。被共感イメージの表情回答については、笑顔誘引感情7種類、渋顔誘引感情3種類のそれぞれで笑顔度得点の平均を算出し、内的作業モデルの各尺度得点との相関を検定したところ(表8)、笑顔誘引感情のみがアンビバレント尺度と有意な負の相関を示した。しかし、全体に相関係数の値は.02以下であり、両者の関連は弱かった。

表6 被共感イメージ課題の表情回答の結果（笑顔の回答数が多い順に示す）

| 感情の種類 | 性別 |           | 笑顔            | 無表情          | 渋顔           | 計   | $\chi^2$ 検定      | 無回答 <sup>1)</sup> |
|-------|----|-----------|---------------|--------------|--------------|-----|------------------|-------------------|
| 得意    | 男子 | 人数<br>(%) | 78<br>(92.9)  | 3<br>(3.5)   | 3<br>(3.6)   | 84  | $\chi^2(3)=2.84$ | 5<br>(5.6)        |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 148<br>(96.1) | 5<br>(3.2)   | 1<br>(.6)    | 154 |                  | <i>n.s.</i>       |
| 喜び    | 男子 | 人数<br>(%) | 75<br>(89.3)  | 8<br>(9.5)   | 1<br>(1.2)   | 84  | $\chi^2(3)=2.37$ | 5<br>(5.6)        |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 143<br>(94.7) | 7<br>(4.6)   | 1<br>(.7)    | 151 |                  | <i>n.s.</i>       |
| 不安    | 男子 | 人数<br>(%) | 73<br>(88.0)  | 9<br>(10.8)  | 1<br>(1.2)   | 83  | $\chi^2(3)=4.74$ | 6<br>(6.7)        |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 143<br>(93.5) | 6<br>(3.9)   | 4<br>(2.6)   | 153 |                  | <i>n.s.</i>       |
| 驚き    | 男子 | 人数<br>(%) | 68<br>(86.1)  | 11<br>(13.9) | 0<br>(.0)    | 79  | $\chi^2(3)=3.70$ | 10<br>(11.2)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 140<br>(91.5) | 11<br>(7.2)  | 2<br>(1.3)   | 153 |                  | <i>n.s.</i>       |
| 期待    | 男子 | 人数<br>(%) | 67<br>(80.7)  | 14<br>(16.9) | 2<br>(2.4)   | 83  | $\chi^2(3)=3.75$ | 6<br>(6.7)        |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 136<br>(89.5) | 13<br>(8.6)  | 3<br>(2.0)   | 152 |                  | <i>n.s.</i>       |
| 好意    | 男子 | 人数<br>(%) | 64<br>(82.1)  | 13<br>(16.7) | 1<br>(1.3)   | 78  | $\chi^2(3)=1.07$ | 11<br>(12.4)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 129<br>(86.0) | 18<br>(12.0) | 3<br>(2.0)   | 150 |                  | <i>n.s.</i>       |
| 恥     | 男子 | 人数<br>(%) | 41<br>(52.6)  | 20<br>(25.6) | 17<br>(21.8) | 78  | $\chi^2(3)=1.89$ | 11<br>(12.4)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 92<br>(60.1)  | 38<br>(24.8) | 23<br>(15.0) | 153 |                  | <i>n.s.</i>       |
| 退屈    | 男子 | 人数<br>(%) | 17<br>(20.2)  | 48<br>(57.1) | 19<br>(22.6) | 84  | $\chi^2(3)=6.69$ | 5<br>(5.6)        |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 46<br>(30.5)  | 60<br>(39.7) | 45<br>(29.8) | 151 |                  | $p<.05$           |
| 悲しみ   | 男子 | 人数<br>(%) | 13<br>(15.9)  | 21<br>(25.6) | 48<br>(58.5) | 82  | $\chi^2(3)=2.35$ | 7<br>(7.9)        |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 28<br>(18.5)  | 26<br>(17.2) | 97<br>(64.2) | 151 |                  | <i>n.s.</i>       |
| 怒り    | 男子 | 人数<br>(%) | 7<br>(8.9)    | 26<br>(32.9) | 46<br>(58.2) | 79  | $\chi^2(3)=3.69$ | 10<br>(11.2)      |
|       | 女子 | 人数<br>(%) | 20<br>(13.2)  | 33<br>(21.9) | 98<br>(64.9) | 151 |                  | <i>n.s.</i>       |

1) 無回答者の%は、全体に占める割合を示す。



表7 被共感イメージ課題の表情回答の因子分析

|        | F 1   | F 2   |
|--------|-------|-------|
| 第1因子   |       |       |
| 笑顔誘引感情 |       |       |
| 得意     | .717  | -.037 |
| 不安     | .681  | .126  |
| 驚き     | .599  | -.020 |
| 期待     | .595  | -.108 |
| 好意     | .558  | -.014 |
| 喜び     | .511  | -.071 |
| 恥      | .370  | .155  |
| 第2因子   |       |       |
| 渋顔誘引感情 |       |       |
| 悲しみ    | -.002 | .553  |
| 退屈     | .095  | .432  |
| 怒り     | -.141 | .354  |
| 因子寄与   | 2.43  | .70   |
| 寄与率(%) | 30.6  | 14.3  |

### 被共感イメージと共感性との関連

共感性の2つの尺度との関連もみたが(表9)、相関係数の値は低く、両者の関連は弱かったため、有意水準を10%まで引き上げて検定を行った。被共感イメージの言語回答における受容度得点の平均は共感経験尺度と正の相関が、共感経験打ち消し尺度とは負の相関がみられた。被共感イメージの表情回答については、笑顔誘引感情の笑顔度得点は共感経験尺度との間に正の相関を示す一方、渋顔誘引感情の笑顔得点は共感経験打ち消し尺度との間に正の相関を示した。

### 考 察

#### 被共感イメージの言語回答について

回答は「受容」と「中立」のイメージを表すものが多数を占めていたが、「拒否」イメージの回答もある程度みられ、母親に対してもっている被共感イメージには個人による違いがあることを見出すことができた。また、被共感イメージは感情

表8 被共感イメージと内的作業モデルとの相関

|          | 安定尺度<br><i>M</i> =3.44<br><i>SD</i> =.82 | 回避尺度<br><i>M</i> =3.19<br><i>SD</i> =.77 | アンビバレント尺度<br><i>M</i> =3.88<br><i>SD</i> =.84 |
|----------|--|--|---|
| 言語回答の受容度 | .053                                     | -.085                                    | -.143*  |
| 表情回答の笑顔度 |  |  |   |
| 笑顔誘引感情   | .053                                     | -.050                                    | -.154*  |
| 渋顔誘引感情   | .035                                     | .019                                     | -.066   |

\**p*<.05

表9 被共感イメージと共感経験との関連

|          | 共感経験尺度<br><i>M</i> =4.48<br><i>SD</i> =.98 | 共感経験打ち消し尺度<br><i>M</i> =2.95<br><i>SD</i> =1.05 |
|----------|--|---|
| 言語回答の受容度 | .156*                                      | -.117†  |
| 表情回答の笑顔度 |  |   |
| 笑顔誘引感情   | .128†                                      | -.077   |
| 渋顔誘引感情   | -.014                                      | .115†   |

†*p*<.10, \**p*<.05



の種類によっても違いがあり、「怒り」「恥」「退屈」「期待」の感情では、他の感情に比べて「拒否」イメージの回答が多かった（表4）。これらの感情に対しては、教育的配慮により拒否的な応答をする母親がいるであろうことが推測される。つまり、「怒り」は文化的に受け入れられづらい感情であることから、「恥」はその経験から失敗の責任を自覚させたいという思いから、また「退屈」「期待」は遊んだり、はしゃいだりしたい気持ちを我慢することの大切さを教えたいという思いから、母親は拒否的な応答をしやすいことが考えられる。特に、「退屈」「期待」感情に対する拒否的なイメージをもつ者は女子よりも男子が多かった。女兒に比べ活発な男児に我慢を教えようとする母親が多いことは察しがつく。このような母親の各感情に対する受け止め方の違いが、感情の種類による被共感イメージの違いに表れたものと考えられる。

以上のように、被共感イメージには感情の種類による違いはあるものの、言語回答の受容度得点は多くの感情間に弱い正の相関があり（表5）、個人の回答にはある程度の一貫性がみられることが示された。つまり、どの感情に対しても受容的な被共感イメージをもつ者と、逆にどの感情に対しても受容的でない被共感イメージをもつ者がいるといえるのである。

#### 被共感イメージの表情回答について

表情回答は、言語回答に比べて回答率が高かった。これは回答が容易であるためでもあろうが、それ以外の理由として、母親の言語的な応答はイメージできなくても、非言語的で感情的な反応はイメージしやすい者がいることが考えられよう。

ポジティブ感情に対しては、ほとんどの者が母親の「笑顔」をイメージした。多くの母親が、子どものポジティブ感情に対して、共感的に同じポジティブ感情で反応するためであろう。「期待」感情については、言語回答で拒否的な被共感イメージをもつ者が2割ほどいたが、表情回答では「渋顔」を選択する者はほとんどおらず、多くが「笑顔」を選択した。これは、母親が笑顔で拒否的な言葉を言っているイメージをもつ者がいることを示す。彼らは、母親が教育的配慮から拒否的な言葉を言うが、「期待」の感情自体は子どもら

しいものとして暖かく受け入れられているイメージをもつと考えられる。他方、いずれのポジティブ感情においても「無表情」や「渋顔」をイメージする者もみられ、表情回答においても被共感イメージの個人差を見出すことができた。

ネガティブ感情では個人差がさらに大きく、また、感情の種類による大きな違いがみられた。「不安」の感情に対しては「笑顔」をイメージする者が多く、母親の多くが不安を訴える子どもを笑顔で励ますイメージをもつようだ。一方、「怒り」や「悲しみ」の感情には「渋顔」をイメージする者が多くみられた。「怒り」の感情は拒否的な言語応答が多くイメージされたことから、子どもの「怒り」に対する母親の拒否的な感情の表れとしてネガティブな表情が選択されることが多くあると考えられる。逆に、「悲しみ」の感情には受容的な言語応答が多くイメージされていた。ここから、「悲しみ」の感情に対する「笑顔」のイメージは、子どもの「悲しみ」に対する憐みという共感的な感情の表れとしてネガティブな表情が選択されたのだろうと推測できる。また、「怒り」や「悲しみ」の感情に対して「笑顔」をイメージする者も少なくなかった。「笑顔」は「大丈夫だよ」「気にするな」といった受容的な励ましの言葉に付随することが多い。このように、子どものネガティブ感情に対する母親の感情的応答をあらわす表情イメージは、ポジティブ感情に比べて複雑で、同じ表情でも感情の種類によって意味が異なったり、また同じ受容的な応答イメージでも表情が異なったりすることがあることがわかった。

表情回答の笑顔度得点をもとに因子分析をしたところ、「笑顔誘引感情」と「渋顔誘引感情」の2因子が抽出された。笑顔誘引感情は、ポジティブ感情のすべてと「不安」「恥」のネガティブ感情から成り、受容的な母親から喜びや励ましといったポジティブな感情を引き出しやすいものと考えられる。渋顔誘引感情は、「悲しみ」「退屈」「怒り」のネガティブ感情から成り、これらの感情に対する被共感イメージは複雑であるが、どちらかという母親から困惑や禁止といったネガティブな感情を引き出しやすいものであるといえよう。



### 被共感イメージと内的作業モデルとの関連

被共感イメージ課題における言語回答の受容度得点、また笑顔誘引感情に対する表情回答の笑顔度得点のいずれもが、アンビバレント尺度得点と負の相関を示した(表8)。このことは、受容的な被共感イメージが、他者と自己の関心に関する心的表象である内的作業モデルの基盤となることを示唆する。つまり、母親からの受容的な被共感イメージがもてない場合に、子どもは安定した自己像を維持できず、「友達が本当は自分を好いていない」といった他者に対する信頼と不信のアンビバレントな表象や、「自分に自信がもてない」といった自己不全感をもつことにつながるものと考えられる。

ただし、安定尺度や回避尺度は被共感イメージと関連しなかった。安定尺度や回避尺度は「人に頼ることができる、あるいはできない」といった他者への援助期待に関するモデルを測定するものであり、このような援助期待は受容的な被共感イメージと直接関係しないようだ。また、アンビバレント尺度との関連も強いものではなく、内的作業モデルが母親についての被共感イメージだけでなく、それ以外の要因からの影響も多く受けると考えられる。実際、青年の内的作業モデルは他者関係のあり方と関連して変動することも報告されている(山岸, 2003)。

### 被共感イメージと共感性との関連

被共感イメージ課題の言語回答の受容度得点は、共感経験尺度と正の相関を、共感経験打ち消し尺度とは負の相関を示した。また表情回答の笑顔度得点は、笑顔誘引感情において共感経験尺度と正の相関を示した。笑顔誘引感情に対する笑顔反応は母親からの受容のイメージであり、言語回答の結果と合わせて、感情場面での母親の受容的な応答イメージをもつ者ほど共感性が高いことが示されたといっていよう。この結果は角田(1993)と一致し、母親についての受容的な被共感イメージが基盤となって、「相手の気持ちと同じ気持ちになる」といった他者への共感性が機能することが改めて示唆された。

一方、笑顔誘引感情における笑顔度得点は共感経験打ち消し尺度と正の相関を示した。子どもの「悲しみ」や「退屈」などのネガティブな感情に

対する笑顔のイメージは、励ましなどのように、子どもの感情を受けとめたいという受容的な言葉に付随する。しかし、このタイプの受容的な応答イメージは、共感性につながらず、逆に「相手の感情を感じとろうとしたことはない」といった共感性を打ち消す態度を促進することが示唆された。ネガティブ感情もありのままにネガティブな感情で映し返されるイメージの方が、より積極的に相手に共感する態度につながるといえるのかもしれない。ただし、相手の感情を感じとろうとしない態度は、冷淡であると捉えられやすい一方で、冷静な援助行動に結びつくことも推測され、その場合には必ずしも悪いことと言えない。この点については異なる角度からの検討を要しよう。「不安」や「恥」といった笑顔誘引のネガティブ感情に対する笑顔イメージには、共感性の打ち消しの効果がないことも考えると、一概に言えないことは確かだ。共感性の基盤としてのネガティブ感情の被共感イメージは、感情の種類によって複雑にその効果が異なるといえそうだ。よってネガティブ感情については、分類基準を再検討したうえで、本研究で取り上げなかった感情も含めたさらなる研究が必要と考える。

また、共感性は母親以外の他者からの被共感経験などからも影響を受けることが知られており(小野・田頭, 2005; 山本, 2007)、母親についての被共感イメージだけで説明できるものではないことも間違いないであろう。

### まとめ

母親についての被共感イメージを、5種類のポジティブ感情と5種類のネガティブ感情を取り上げて、言語的側面と感情的側面の両方から検討をおこなったところ、被共感イメージの個人差と、感情の種類による違いが見出された。そして、受容的でない被共感イメージをもつ者ほどアンビバレントな内的作業モデルをもち、共感性が低いことが明らかとなった。ただし、「悲しみ」や「退屈」といったネガティブ感情に対して母親のポジティブ感情がイメージされる者では、たとえそれが受容的なイメージであっても、共感経験を打ち消す傾向が高くなる可能性も示唆された。



## 註

本研究は、筆者が2001年度に担当した心理学基礎演習において、3年次ゼミ生であった今瀬香奈さん、工藤貴子さん、柳岡沙耶香さん、吉田有里さんが実習として行った研究データを、筆者が再分析してまとめたものである。

## 引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Bowlby, J. (1973). Attachment and loss: Vol.2; Separation. Basic Books. (黒田実郎ほか(訳) (1977). 母子関係の理論Ⅱ：分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1980). Attachment and loss: Vol.3; Loss, sadness and depression. Basic Books. (黒田実郎ほか(訳) (1981). 母子関係の理論Ⅲ：愛情喪失 岩崎学術出版社)
- 角田 豊 (1991). 共感経験尺度の作成. 京都大学教育学部紀要, 37, 248-258.
- 角田 豊 (1993). 共感性と母親から共感されるイメージとの関連—自己対象機能の観点からみた共感性と性差について. 心理臨床学研究, 10, 76-81.
- 小野綾子・田頭穂積 (2005). 被共感経験が共感性と向社会的行動に及ぼす影響. 心理教育相談センター年報, 13, 55-63.
- 大辻隆夫・塩川真理 (2000). 幼児の共感性に関する研究—幼児の不安に対する母親の共感的応答の分析を通して—. こころの健康, 15, 69-78.
- 立道友希 (2007). 母親からの被共感イメージと青年期の自意識との関連. 平成18年度昭和女子大学人間社会学部心理学科卒業論文 (未公開)
- 戸田弘二 (1990). 女子青年における親の養育態度の認知とInternal Working Models との関連. 北海道教育大学紀要 (第1部C), 41, 91-100.
- 山岸明子 (2003). 女子看護短大生における内的作業モデルの連続性とその変動に関連する要因：縦断的データに基づいて. 順天堂医療短期大学紀要, 14, 121-130.
- 山本翔太 (2007). 共感経験と被共感経験の関連. 立教大学臨床心理研究, 1, 53-63.

---

(まつざわ まさこ 昭和女子大学大学院生活機構研究科)